九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

秦観の死と再生の詩 ： 「和陶詩」継承の一形態

原田, 愛
金沢大学人間社会研究域学校教育系 ： 准教授

https://doi.org/10.15017/4763186

出版情報：中国文学論集. 50, pp.78-95, 2021-12-24. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

秦観の死と再生の詩

――「和陶詩」継承の一形態

原田　愛

北宋を代表する文人である蘇軾（字は子瞻、号は東坡居士）が、晩年に陶淵明の詩に和韻する「和陶詩」を創作したことは有名である。しかし、彼がその詩を弟の蘇轍（字は子由）や蘇門の門人たちに示し、継和を促したことについてはあまり知られていない。また、蘇軾自身は百二十四首もの陶淵明詩に和韻し、蘇轍も五十二首に継和したが、蘇軾が門人たちに主に求めたのは「歸去來兮辭」（『陶淵明集』巻五）の継和であり、その端緒が黄庭堅（字は魯直）と秦観（字は太虚、後に少游と改む）であったことはほぼ注視されていなかった。

秦観は、繊細優美な詩詞の創作を得意とした文人で、蘇門の筆頭格たる「蘇門四学士」の一人に数えられた。論者は以前、黄庭堅が自らの文学思想のために敢えて「歸去來兮辭」に和韻せず、「和李詩」を詠んで蘇軾への追悼の念を表したことを論じた。[1] 但し、その際、黄庭堅とは対照的に「歸去來兮辭」に継和した秦観について、考察するに至らなかった。また、管見の及ぶところでは、このことを詳しく論じた先行研究は見当たらない。そこで、本稿では、秦観が「和陶詩」を創作した経緯とその内容を辿り、晩年の秦観の処世観の一端を明らかにしたい。

一．秦観に「和陶詩」が寄せられた経緯

蘇軾が亡くなった三箇月後の建中靖国元年（一一〇一）十月、蘇轍は、蘇軾が「歸去來兮辭」の継和を促した経緯について、次のように述懐した。

昔予謫居海康、子瞻自海南以「和淵明歸去來」之篇、要予同作。時予方再遷龍川、未暇也。辛巳歲、予既還潁川、子瞻渡海浮江、至淮南而病、遂沒於晉陵。是歲十月、理家中舊書、復得此篇、乃泣而和之。蓋淵明之放與子瞻之辯、予皆莫及也。示不逆其遺意焉耳。

昔予海康に謫居せしとき、子瞻海南より「淵明の帰去来に和す」の篇を以て、予の同作するを要(もと)む。時に予方に龍川に再遷せられ、未だ暇あらざるなり。辛巳歲（建中靖国元年、一一〇一）、予は既に潁川に還るに、子瞻は渡海浮江して、淮南に至りて病み、遂に晉陵に沒す。是の歲十月、家中の旧書を理(おさ)め、復た此の篇を得て、乃ち泣(なみだ)して之に和す。蓋し淵明の放と子瞻の弁とは、予皆及ぶこと莫きなり。其の遺意に逆らはざるを示すのみ。

蘇轍「追和陶歸去來兮辭」引（『和陶詩集』巻四）[2]

即ち、元符元年（一〇九八）三月、蘇轍は雷州安置から循州安置に移されることになり、八月に循州に至ったが、この間に海南島の儋州に居た蘇軾は「歸去來兮辭」に和韻し、それを蘇轍に寄せて継和を求めたという。当時の蘇轍は移居の忙しさでやむを得ず先送りしたのだが、蘇軾の歿後に遺文を整理してその和韻の作を再び目にした。そして、蘇軾の生前にその思いに応えられなかったことを悔やみ、「歸去來兮辭」に追和したのである。

また、蘇門の門人李之儀（字は端叔）は、政和元年（一一一一）八月に次のように蘇轍の言葉を回顧した。

予在潁昌、一日從容、黄門公遂出東坡所和。不獨見知爲幸、而於其卒章始載「其後身盡和」。平日談笑、間所及、公又曰「家兄近寄此作、令約諸君同賦、而南方已與魯直・少游相期矣。二君之作未到也。」居數日、黄門公出其所賦、而輒與牽強。後又得少游者、而魯直作與不作未可知、竟未見也。張文潛・晁無咎・李方叔亦相繼而作、三人者雖未及見、其賦之則久矣、異日當盡見之。

予潁昌に在りしとき、一日從容たり、黄門公（蘇轍）遂に東坡の和する所を出す。独り見知して幸ひと為すのみならず、而(しか)も其の卒章に於いて始めて「其の後身にして尽く和せり」と載す。平日談笑して、間ま及ぶ所あり、公又た曰はく「家兄 近く此の作を寄せ、諸君の同(とも)に賦するを約せしめんとし、南方にて已に魯直（黄庭堅）・少游（秦観）と相ひ期せり。二君の作 未だ到らざるなり」と。居ること数日、黄門公其の賦する

所を出し、輒ち牽強を与ふ。後に又た少游の者を得るも、魯直の作るか作らざるかは未だ知るべからずして、竟に未だ見ざるなり。張文潛（張耒）・晁無咎（晁補之）・李方叔（李廌）も亦た相ひ継いで作り、三人の者は未だ見るに及ばずと雖も、其の之を賦すこと則ち久し、異日当に尽く之を見るべし。

李之儀「跋東坡諸公追和淵明歸去來引後」（『姑溪居士後集』巻十五）[3]

李之儀は、潁昌府において蘇轍から蘇軾の「和陶歸去來兮辭」を示された。更に、蘇轍は、生前の蘇軾が「諸君の同（とも）に賦するを約せしめん」とし、まず黄庭堅と秦観に「歸去來兮辭」の和韻を求めたという経緯を語ったという。李之儀が潁昌府にいた時期は、河東路の提挙常平倉に務めた元符三年（一一〇〇）から崇寧元年（一一〇二）七月までであるため、彼らがこの遣り取りをしたのは、蘇轍が「歸去來兮辭」に追和した建中靖国元年（一一〇一）十月から李之儀が潁昌府を去った崇寧元年（一一〇二）七月までの間に限定できる。そして、蘇軾の遺志を受け継いだ蘇轍は、李之儀や張耒（字は文潛）・晁補之（字は無咎）・李廌（字は方叔）などの主な門人たちに蘇軾の生前の意向を伝え、「歸去來兮辭」の継和を促したのであった。

そして、以上の蘇轍の言から、蘇軾が黄庭堅・秦観に継和を求めた時期も元符元年（一〇九八）以後であること、また、「二君の作 未だ到らざるなり」とあるように、生前の蘇軾も崇寧元年（一一〇二）頃の蘇轍も、秦観の「歸去來兮辭」の継和の作を受け取っていなかったことが判る（現存する蘇門の門人の「和陶詩」については左図参照。後に蘇轍は秦観の作を受け取ったらしい。他に李廌や釈道潛（号は参寥子）なども詠んだが、流伝していない）[4]。

作者	創作時期	年齢	作品名（各別集における巻数）
秦観	元符三年（一一〇〇）	52	「和淵明歸去來辭」（『淮海集箋注』巻一）
晁補之	元祐七年（一〇九二）	40	「飲酒二十首、同蘇翰林先生次韻追和陶淵明」（『雞肋集』巻四）
	崇寧元年（一一〇二）～	50～	「追和陶淵明歸去來辭」（『雞肋集』巻三）
張耒	紹聖三年（一〇九六）	43	「次韻淵明飲酒詩」（『柯山集』巻七）
	崇寧元年（一一〇二）～	49～	「和歸去來詞」（『柯山集』巻五）
李之儀	崇寧元年（一一〇二）	55	「次韻子瞻追和歸去來」（『姑溪居士後集』巻十三）

それでは、なぜ蘇軾は門人たちの中から秦観を選んで、継和を求めたのであろうか。元符元年（一〇九八）、五十歳の春、秦観は謫所を衡州から横州に移され、更に九月に除名の上で雷州編管となり、翌元符二年（一〇九九）始めに着任した。つまり、秦観はほぼ蘇轍と入れ替わりで雷州にやって来たのである。そして、その元符二年（一〇九九）春、秦観は「飲酒詩四首」を詠んだ。因みに、蘇軾の最初の「和陶詩」は、元祐七年（一〇九二）に陶淵明「飲酒二十首」に和韻して詠んだ「和陶飲酒二十首」であるが、同年に蘇轍と晁補之が、紹聖三年（一〇九六）には張耒が継和した。秦観の「飲酒詩四首」は、和韻の作ではなく「擬陶詩」であるが、明らかに一連の蘇軾たちの「和陶飲酒詩」に触発されて詠まれたものである。まず、其一では次のように詠まれた。

我觀人間世　無如醉中眞　　我人間の世を観れば、酔中の真に如くは無し。
虛空爲消隕　況乃百憂身　　虛空 為に消隕するに、況んや乃ち百憂の身をや。
惜哉知此晩　坐令華髮新　　惜しいかな 此の晩きを知り、坐ろに華髪をして新ならしむ。
聖人難驟得　得且致賢人　　聖人は驟かに得ること難し、且く賢人に致るを得ん。

秦観「飲酒詩四首」其一（『淮海集箋注』巻五）[5]

即ち、秦観は人生を見つめ直し、陶淵明の云う「酔中の真」、即ち酒に酔う中で得られる「真」の心こそが最も重要であると悟った。「虛空 為に消隕す」は、『首楞嚴經』巻九に見える「汝等一人發眞歸元、此十方空、悉皆銷殞（汝等一人真に発して元に帰すれば、此の十方の空、悉く皆銷殞す）」を典拠とし、飲酒によって自らの心があるがままの自由な状態に帰することであらゆる煩悩が霧消していったというのである。[6] しかしながら、それを知ったのは既に遅く五十歳を越えたところであり、虛しく年を重ねたことを惜しむことになった。そこで、その憂悶を消すべく更に酒を飲もうとしたものの、辺鄙な雷州に逼塞する我が身では急ぎ高価な清酒を得て聖人となることは難しく、当地の濁酒を飲んで賢人となり得るのが精々であろうと詠んだのであった。

其二、其三では秦観は実際に酒を酌み、天地の境も忘れるほどの酔い心地となるも、それを遮る「客」がやって来て、茶を勧められるなどして酔いから醒めてしまう。しかし、再び「酔中の真」に戻ってきて喜びをかみしめる様子が詠まれた。[7] そして、其四で次のように結ばれる。

雷觴淡如水　經年不濡脣　　雷觴 淡きこと水の如し、経年 脣を濡らさず。
爰有擾龍系　爲造英靈春　　爰に擾龍の系有り、為に英霊の春を造る。
英靈韻何高　葡萄難爲鄰　　英霊 韻何ぞ高からん、葡萄 隣と為すに難し。
他年血食汝　應配杜康神　　他年 汝を血食し、応に杜康の神に配すべし。

秦観「飲酒詩四首」其四（『淮海集箋注』巻五）

雷州の酒は淡泊で深い味わいはないが、ここには劉氏の末裔が居り、彼らは新春に「英霊の春」という先祖を祭るための酒を造っていた。そこで、秦観はいつか土地の葡萄を用いた酒を祭祀に捧げることを促している。[8] このように、秦観の「飲酒詩四首」は、度重なる謫遷により憂愁を深めた詩詞を創作していた当時の秦観にしては些か異色の作であり、多様な知識とユーモアによって自らの苦しみや後悔を俯瞰しながら、謫所にあってその風物、特に酒に生きる楽しみを見出そうとしている。こうした強靱な姿勢には蘇軾の影響が強く表れていると言えよう。

そして、以上述べてきたように、雷州に流謫された秦観が失意の身であり、かつ、地理的に詩文交流が行い易かったこと、秦観が「飲酒詩四首」という「擬陶詩」を創作して関心を示したこと、そして、当時の黄庭堅・秦観が「和陶詩」を詠んでいなかったこと（晁補之や張耒は「飲酒詩」に和韻していた）などに鑑みて、蘇軾は元符二年（一〇九九）のうちに秦観に「歸去來兮辭」の和韻を求めたと考えられる。

二．秦観の死生観と陶淵明の「挽歌詩」

但し、秦観は、蘇軾の要請を受けてすぐに継和したわけではなく、更に別の「擬陶詩」を創作した。それが陶淵明「擬挽歌詩三首」（『陶淵明集』巻四）に倣擬した「自作挽詞」である。[9] 因みに、この「擬挽歌詩三首」に対して、蘇軾は和韻を行っていない。このことから、秦観はただ蘇軾に言われるがままに踏襲するのではなく、陶淵明の詩境に対して独自のアプローチを試みたことが判る。

では、そのアプローチの経緯と実態を見ていきたい。元符三年（一一〇〇）正月、哲宗の崩御、徽宗の即位に伴

い、皇太后向氏による垂簾聴政が始まり、左遷されていた旧法党は恩赦によって復権することになった。二月には秦観も英州別駕となり、更に四月には衡州に移ることを命じられ、五月にそれが伝えられた。蘇軾もまた二月に廉州安置となり、六月に海南島の儋州を出立し、途上、秦観の居る雷州に立ち寄った。そして、その間の元符三年（一一〇〇）初春、秦観は「自作挽詞」を詠んだ。その題自注には、「昔鮑照・陶潛自作哀挽、其詞哀。讀予此章、乃知前作之未哀也（昔鮑照・陶潛は自ら哀挽を作るに、其の詞哀し。予の此の章を読めば、乃ち前作の未だ哀しからざるを知るなり）」とあり、自らの「死」を想定した鮑照「代挽歌一首」（『鮑氏集』巻七）および陶淵明「擬挽歌詩三首」に見える悲哀の表現を評価しながら、「自作挽詞」は彼らの挽歌より哀切なる思いを表し得たと自負する。便宜上、三段落に分けながら、以下、その本文を挙げる。

嬰釁徙窮荒　茹哀與世辭
官來錄我槀　吏來驗我屍
藤束木皮棺　藁葬路傍陂
家鄉在萬里　妻子天一涯
孤魂不敢歸　惴惴猶在茲

昔忝柱下史　通籍黃金閨
奇禍一朝作　飄零至於斯
弱孤未堪事　返骨定何時
修途繚山海　豈免從闇維
荼毒復荼毒　彼蒼那得知
歲晚瘴江急　鳥獸鳴聲悲
空濛寒雨零　慘淡陰風吹

嬰釁して窮荒に徙り、哀しみを茹めて世と辞す。
官来たりて我が槀を録し、吏来たりて我が屍を験す。
藤もて木皮の棺を束ね、藁もて路傍の陂に葬る。
家郷 万里に在り、妻子 天の一涯にあり。
孤魂 敢へて帰らず、惴惴として猶ほ茲に在り。

昔 柱下の史を忝くし、黄金の閨に通籍す。
奇禍 一朝に作り、飄零して斯に至る。
弱孤 未だ事に堪へず、骨を返すこと定めて何れの時ならん。
修途 山海を繚ひて、豈に闇維に従ふを免ぜんや。
荼毒して 復た荼毒す、彼蒼 那ぞ知るを得ん。
歳晩 瘴江 急にして、鳥獸の鳴声 悲し。
空濛として寒雨零れ、慘淡として陰風吹く。

殯宮生蒼蘚　紙銭掛空枝　　殯宮 蒼蘚生え、紙銭 空枝に掛く。
無人設薄奠　誰與飯黄緇　　人の薄き奠を設くる無く、誰か飯を黄緇に与へん。
亦無挽歌者　空有挽歌辭　　亦た挽歌する者無く、空しく挽歌の辞有るのみ。

秦観「自作挽詞」（『淮海集箋注』巻四十）

まず、彼が罪を得て嶺南の南端にある雷州に遷され、そこで非業の死を遂げたところから始まる。その後、官吏がやって来て所持品を記録し、屍を検分した。そして、その屍は藤の蔦や木皮の付いた棺でもって、路傍の堤に藁を被せて簡素に葬られていったという。六朝初期の伝統的な挽歌の構成は、三首一連で納棺（葬儀）・葬送・埋葬が順次詠まれるものである。秦観「自作挽詞」も三段落の構成であるが、第一段落は死して納棺され、また、慌ただしく埋葬される様子が描かれている。つまり、秦観が雷州に流謫された身であったために、間に合わせの材料と儀式で納棺から埋葬までの全てが行われてしまい、屍も魂も故郷である揚州高郵や妻子のもとに帰れないことが詠まれているのである。

次に、第二段落では、元祐五年（一〇八九）に太学博士・秘書省校対黄本書籍となり、次いで国史院編修官を兼ねて華やかな宮廷生活を送っていたが、政変によって雷州にまで謫され、死を迎えた彼の人生の浮沈が回顧される。そして、残された息子の秦湛（字は処度）は、その亡父の骨を持って故郷に帰り、正式な葬礼を行うことができないことを憂苦する。それどころか、雷州は僻遠の地であるために亡父の屍は跡形もなく火葬され、秦湛は苦しみを一層深めることになるであろうと詠んでいる。

第三段落では、雷州に縛られた秦観の魂が詠われる。病を運ぶ毒気の漂う河川は流れが急になり、鳥も獣も哀しげな鳴き声を響かせる年の瀬に、寒々しく雨が降って霧が立ちこめ、冷たい風が曇天のもと吹きすさぶ。殯宮には青苔が生え、現地の人が花も実も無い枝に紙銭を掛ける中、彼の墓前には、粗末な供物をする者も経文を捧げる僧を呼ぶ者も、挽歌を吟じてくれる者もいない。ただこの自ら詠んだ「自作挽詞」の言辞が残るだけであるという。

この秦観の「自作挽詞」は全体を通して陶淵明の「擬挽歌詩三首」を意識しており、かつ、第二段落は鮑照「代挽歌一首」も念頭に置いて作られている。まず、陶淵明は其一において、

有生必有死　早終非命促　　生有れば必ず死有り、早く終はるも命の促まれるに非ず。
昨暮同爲人　今旦在鬼録　　昨暮は同じく人為りしに、今旦は鬼録に在り。
魂氣散何之　枯形寄空木　　魂気散じて何くにか之く、枯形を空木に寄す。
嬌兒索父啼　良友撫我哭　　嬌兒は父を索めて啼き、良友は我を撫でて哭く。
…（中略）…
但恨在世時　飲酒不得足　　但だ恨むらくは世に在りし時、酒を飲むこと足るを得ざりしを。

と、人の「生」の運命とその無常さ、儚さを詠み、自らの魂も身体も無に帰することが「死」であると、淡々と描写しつつ、だからこそ生前に酒を飲んで人生の楽しみを尽くすべきとする陶淵明独自の死生観が示される。これについて川合康三氏は、「生死という重大な問題を飲酒に帰結させる価値観の転倒、ここに陶淵明らしい諧謔がこめられて」いると指摘している。[10]

この「生」と「死」を、陶淵明は其二において更に対比させる。

昔在高堂寢　今宿荒草鄉　　昔は高堂の寝に在りしも、今は荒草の郷に宿る。
一朝出門去　歸來良未央　　一朝門を出でて去らば、帰来良に未だ央きず。

このように、「高堂」に眠った生前と「荒草」の中に横たわる死後の状態を描き、飲酒を楽しむことも死しては叶わないと詠んだ。鮑照「代挽歌一首」もこの生前と死後の境遇の落差と心情の変化を重ねて詠むことで、その対比を強調している。[11] そして、秦観は「自作挽詞」の第二段落でこの表現法を活用し、自らの生前と死後を対比し、更には死した自分と残された息子の情景と心理をも対比的に描写して、悲哀を深化させたのである。

そして、陶淵明は次のように詠んで「擬挽歌詩三首」を結んだ。

荒草何茫茫　白楊亦蕭蕭　　荒草は何ぞ茫茫たる、白楊も亦た蕭蕭たり。
嚴霜九月中　送我出遠郊　　厳霜九月の中、我を送りて遠郊に出づ。
四面無人居　高墳正嶕嶢　　四面に人居無く、高墳は正に嶕嶢たり。
馬爲仰天鳴　風爲自蕭條　　馬は為に天を仰ぎて鳴き、風は為に自ら蕭條たり。

幽室一已閉　千年不復朝　　幽室 一たび已に閉ざせば、千年 復た朝ならず。
千年不復朝　賢達無奈何　　千年 復た朝ならざるは、賢達も奈何ともする無し。
向來相送人　各自還其家　　向来 相ひ送りし人は、各自 其の家に還る。
親戚或餘悲　他人亦已歌　　親戚 或ひは悲しみを余し、他人も亦た已に歌ふ。
死去何所道　託體同山阿　　死し去れば何の道ふ所ぞ、体を託して山阿に同じからん。

この前半では墳墓に埋葬に赴く道中の「荒草」・「嚴霜」の寒々しい様子、そして、墳墓を前に哀しく嘶く「馬」や寂しく吹きすさぶ「風」などの情景描写が為されている。秦観はこれを踏まえながら、その詩で雷州の自然に鑑みて、「瘴江」や「鳥獸」の声、「寒雨」・「陰風」などの語句を用いた。

そして、陶淵明詩の其三の後半では換韻により場面が転換する。前句を繰り返す十一句目からは埋葬を終えた後の描写である。その帰途で陶淵明の死を悼んで親族は有り余る哀しみを表し、他人も挽歌を歌ってくれた。[12] しかし、死んだ自分は彼らに何も言うことはできず、屍が山の土と同化して無に帰するだけであるという。秦観「自作挽詞」の末の二句「亦た挽歌する者無く、空しく挽歌の辞有るのみ」は、この十五・十六句目を踏まえている。雷州で埋葬された後の秦観のもとには、その非業の死を悼んで挽歌を唱う親戚も他人もいない。ただ、空しくこの「自作挽詞」の言辞だけが残るのであり、秦観はそれを慰めとするほか無いのであった。川合氏は陶淵明「擬挽歌詩三首」を総括して「ここには死の恐れも死の諦観も」なく、「死を人の現実として淡々と見ている冷静な視線があるばかり」であると述べたが、秦観の「自作挽詞」には、彼の一年前の作である「飲酒詩四首」に見えた強靭な楽天性は失われており、死に対する冷静な視線というより、圧倒的なまでの悲哀と絶望が詩全体を覆っていると言えよう。

この数箇月後の元符三年（一一〇〇）六月末、蘇軾は北帰の途上で雷州に立ち寄った。その際に、彼は秦観から「自作挽詞」を示されたという。

庚辰歳六月二十五日、予與秦少游相別於海康。意色自若、與平日不少異。但「自作挽詞」一篇、人或怪之。予以謂少游齊死生、了物我、戲出此語、無足怪者。已而北歸至藤州、以八月十二日卒於光化亭上。嗚呼、豈亦自知當然者耶、乃錄其詩云。

庚辰の歳（元符三年、一一〇〇）六月二十五日、予は秦少游と海康に相ひ別る。意色自若として、平日と少しも異ならず。但だ「自ら挽詞を作る」一篇あり、人或ひは之を怪しむ。予以謂らく少游は死生を斉しくし、物我を了（さと）り、戯れて此の語を出せば、怪しむに足る者無しと。已にして北帰して藤州に至るに、八月十二日を以て光化亭の上に卒す。嗚呼、豈に亦た自ら当に然るべきを知る者なるか、乃ち其の詩を録して云ふ。

蘇軾「書秦少游挽詞後」（『蘇軾文集』巻六十八）[13]

即ち、蘇軾は、秦観が死と生、外物と自我の境を越え、人生を巨視するに至ったとし、それにより自らの死をも俯瞰的に戯画化したのであろうと推測している。それは、蘇軾に「自作挽詞」を示したときの秦観が「意色自若として、平日と少しも異な」らない様子であったことが一因であり、また、原詩たる陶淵明「擬挽歌詩三首」が自らの死を空想し戯画化した作であったことにも拠る。しかし、秦観が「自作挽詞」を詠んだのはまだ恩赦の報せを受けていない時期であり、蘇軾と再会したのは秦観も報せを受けて北帰の準備を進めていたときのことである。

秦観は五十歳を越えてから雷州に謫され、そのまま一年余りの歳月を経た。その日々の中で謫所で死去した友人や親戚のことを伝え聞き、自らも雷州で「死」を迎える可能性を強く意識するに至った[14]。その際に陶淵明の「擬挽歌詩三首」とそこで詠まれた死生観に対して思うところがあり、それに倣擬して自らの挽歌を詠んだのである。南宋の胡仔は、「死生を斉しくし、物我を了（さと）」ったという蘇軾の評に疑義を呈し、「此言惟淵明可以當之。若太虛者、情鍾世味、意戀生理、一經遷謫、不能自釋、遂挾忿而作此詞（此の言は惟だ淵明のみ以て之に当たるべし。太虛の若き者は、情は世味を鍾め、意は生理を恋ひ、一に遷謫を経て、自ら釈する能はず、遂に忿を挾みて此の詞を作る）」と述べたが[15]、これはかなり的を射たものであった。当時の秦観にとって、現在の「生」もこれから迎える「死」も、独りで雷州に縛られ続ける絶望であり、殊に「死」は取り残される妻子に更なる憂苦を与え、自らの悲哀も一層深めるものであり、結局、「飲酒」による一時的な心の解放で救われることはなかったのである。

三．秦観の処世観と「歸去來兮辭」の継和

元符三年（一一〇〇）七月、蘇軾から直に促されたのか、蘇軾を見送った後に秦観は陶淵明「歸去來兮辭」の継和を行った。この秦観「和淵明歸去來辭」（『淮海集箋注』巻一）は、当然ながら原詩たる「歸去來兮辭」と同じところで換韻が行われているため、それに沿った五章構成となっている。秦観は、まず第一章で次のように詠み起こした。

歸去來兮、眷眷懷歸今得歸。念我生之多艱、心知免而猶悲。天風飄兮余迎、海月烱兮余追。省已空之憂患、疑是夢而復非。及我家於中途、兒女欣而牽衣。望松楸而長慟、悲心極而更微。

帰りなんいざ、眷眷として帰るを懐ひて今帰るを得たり。我が生の多艱なるを念ひ、心に免るるを知りて猶ほ悲しむ。天風 飄として余を迎へ、海月 烱として余を追ふ。已に空の憂患なるを省みれば、是れ夢にして復た非なるかを疑ふ。我が家の中途に及び、児女欣びて衣を牽く。松楸を望みて長く慟し、悲心極まるも更に微たり。

「帰りなんいざ、眷眷として帰るを懐ひて今帰るを得たり」と、まず秦観は恩赦とそれによる北帰に感謝して喜んだ。その一方で、これまでの数々の艱難辛苦から悲しみを抑えきれず、かつ、なおこれが夢か現実か疑わしくも思っていた。しかし、息子や娘が欣然と自分の上衣を引いて帰路を進む様子を見て、墓場にある松や楸を眺めては感じていた悲嘆も薄れゆくことになったという。この「松楸を望みて長く慟し」たとは、かつて「死」を憂苦した「自作挽詞」の創作を指すものであろう。

升沈幾何、歳月如奔。嗟我宿昔、通籍璧門。賜金雖盡、給札尚存。愧此散木、繆爲犧尊。

升沈すること幾何ぞ、歳月 奔るが如し。嗟 我は宿昔、璧門に通籍す。賜金 尽くすと雖も、給札 尚ほ存す。此の散木の、繆りて犧尊と為るを愧づ。

屬黨論之云興、雷霆發乎威顔。淮南謫於天庖、予小子其何安。歳七官而五譴、越鬼門之幽關。化猿鶴之有日、

詎國光之復觀。忽大明之生東、釋纍囚而北還。釃天漢而一洗、覺宇宙之隨寛。
党論の云に興るに属して、雷霆発して威顔あり。淮南天庖に謫せられ、予が小子其れ何ぞ安からん。歳に七たび官して五たび譴され、鬼門の幽関を越ゆ。猿鶴に化して之れ日有り、詎ぞ国光之れ復た観ん。忽ち大明の東に生じ、累囚を釈して北還せしむ。天漢を釃して一に洗ひ、宇宙の寛きに随ふを覚ゆ。

第二章からは、これまでの人生に思いを馳せる。まず、「自作挽詞」でも言及があったが、秦観はかつて秘書省校対黄本書籍や国史院編修官に抜擢されたことをふり返り、不才の我が身には分不相応であったという。彼がこのように繰り返し慨嘆するのは、その在任時に『神宗實錄』の編修校正に従事したことが、自らが厳しく弾劾され処罰された要因であったためであろう[16]。更に、第三章では、新旧の党派争いの激化から幾度も流謫された後、哲宗の崩御および徽宗の即位から恩赦による北帰を果たしたことを回顧した上で、現在の解放感を詠んでいる。

そして、秦観は、第四章においてこれから行く故郷での展望とこれまでの道のりの総括を行った。

歸去來兮、請逍遙於至游。内取足於一身、復從物兮何求。榮莫榮於不辱、樂莫樂於無憂。鄉人告予以有年、黍稷鬱乎盈疇。止有敝廬、泛有扁舟。濯予足兮寒泉、振予衣兮古丘。洞胸中之滯礙、眇雲散而風流。識此行之匪禍、乃造物之餘休。

帰りなんいざ、至游に逍遥せんことを請ふ。内に足るを一身に取り、復た物に従ひて何をか求めん。栄は辱められざるより栄なるは莫く、楽は憂ひ無きより楽しきは莫し。郷人予に以て年有るを告げ、黍稷鬱として疇に盈つ。止まるに敝廬有り、泛ぶに扁舟有り。予の足を寒泉に濯ひ、予の衣を古丘に振ふ。洞として胸中に滞礙し、眇として雲散じて風流る。此の行の禍ひに匪ずして、乃ち造物の余休なるを識る。

この前半部分は、『荘子』の「逍遙游」は勿論であるが、『列子』仲尼篇において壺丘子林が列子を諭した際の「外游者、求備於物。内觀者、取足於身。取足於身、游之至也。求備於物、游之不至也（外游する者は、備はるを物に求む。内観する者は、足るを身に取る。足るを身に取るは、游の至りなり。備はるを物に求むるは、游の至らざるなり）」という言を典拠とする。つまり、外界の物事に振り回されず、ただ己の心を観察し、その心を自由に遊ばせることこそが「至游（至高の游）」であった。かかる師の言に感銘を受けた列子はそれを終生実行したが、彼自

身としてはなお「游」を理解するに至っていないとした。それを見た壺丘子林は、「游其至乎。至游者、不知所適。至觀者、不知所眠。物物皆游矣、物物皆觀矣。是我之所謂游、是我之所謂觀也（游は其れ至れるか。至游の者は、適く所を知らず。至観の者は、眠る所を知らず。物物皆游し、物物皆観らん。是れ我の所謂游なり、是れ我の所謂観なり）」と、称えたのである。秦観はこの『列子』の思想に共感し、自らも「至游」を志向した。これは、彼の名である「觀」、字である「少游」を改めて意識したものでもあろう。故に、「栄」は外から辱められず、「楽」は心の内に憂いが無ければそれが最良であり、ただ故郷の人と作物の様子を歓談し、粗末な庵と舟を以て暮らし、自らに付いた俗塵を全て払い落として、近隣の自然に遊ぶことを夢想する。そして、冤罪による蟠りは既に終わったことであり、これまでの道のりは災禍ではなく、ふと過った日蔭のようなものであったと認識するに至ったのであった。[17]

その上で、第五章にて、死にゆくまでの自らの生き方と心構えを次のように詠んだ。

已矣哉、桔槔俛仰無已時。舉觴自屬聊淹留、汝今不已將安之。封侯已絶念、仙事亦難期。依先塋而灑掃、從稚子而耘耔。修杜康之廢祠、補由庚之亡詩。爲太平之幸老、幅巾待盡更奚疑。

已んぬるかな、桔槔は俛仰して已む時無し。觴を挙げて自ら属して聊か淹留し、汝は今已まざるに将に安くに之かん。封侯は已に絶念し、仙事も亦た期し難し。先塋に依りて灑掃し、稚子に従ひて耘耔せん。杜康の廃祠を修め、由庚の亡詩を補はん。太平の幸老と為り、幅巾もて尽くるを待つこと更に奚ぞ疑はん。

即ち、『荘子』天運篇に「且子獨不見夫桔槔者乎。引之則俯、舍之則仰。彼人之所引、非引人也、故俯仰而不得罪於人（且つ子は独り夫の桔槔なる者を見ざるや。之を引けば則ち俯し、之を舍けば則ち仰ぐ。彼は人の引く所にして、人を引くに非ざるなり、故に俯仰して罪を人に得ず）」とあるが、秦観はこの「桔槔（井戸のはねつるべ）」の在り方に理想的な処世を見出したのであった。それは、人から引き立てられたり貶められたりすることが反対の結果を齎すことが人生には屢々あり、そうした事象をあるがままに受け容れて生きることにより、却って人から咎められることも無くなるというもので、具体的には、どこに左遷されることもなく、ただ飲酒を心のままに楽しみ、先祖の墓を掃き清め、子に従って農耕を行うことであるという。更に、酒の神である杜康の祠を祀り直し、『詩經』小雅「由庚」を補うと述べている。この「由庚」は、素晴らしい君主のもとで万民万物が正しい道に従って生きる、

そんな幸いなる世を願い、また、言祝ぐことが主題の詩であり、かつては饗宴で笙によって演奏されたが、遠い昔に散逸してしまっていた。[18] 秦観は、この「由庚」を補う詩を詠むことを望んだのである。これは、飲酒による身心の解放を祭祀や詩文の創作によっても究め、生きる楽しみを尽くすということでもあろう。秦観はそのまま幸福に老いゆき、「幅巾（一幅の布で作った粗末な頭巾）」を被った隠士として自然に生命が尽きるのを待つ、そんな余生を願ったのである。こうした先祖や霊神を尊びながら息子とともに農耕に従事し、ただ酒と文学を愛することを是とする処世観は、秦観のこれまでの人生と『荘子』『列子』などの思想から導き出された実感的なものであり、かつ、結果として陶淵明の処世観にも通じるところがあった。

因みに、蘇軾が「歸去來兮辭」を継和したのは、彼が海南島の儋州に流謫されて二年ほど経過した元符元年（一〇九八）の秋頃のことであり、その中で蘇軾は身体が儋州という南端の辺境に居たとしても、心を「帰隠」させて解放することは可能であり、生死は命運であり死は避けられないものであるからこそ、今ここで「帰隠」を果たすべきであると詠んだ。[19] 蘇軾からそれを示され、継和を促された頃、殊に「自作挽詞」を詠んだ前後の秦観では、かかる蘇軾の詩境に尊崇の念を抱くことはあっても、共感することはできなかったのであろう。恩赦により召還の命を受け、故郷に帰る見通しが付いた後、秦観はやっと自らの「歸去來兮辭」を詠むことができた。彼の「歸去來兮（帰りなんいざ）」とは、現実に果たされた北帰により身心が解放されて自らが望む処に帰ることであり、そこから自らの心と処世を見つめ直して、穏やかに死に帰着してゆくことであった。

小結

元符元年（一〇九八）九月、雷州編管に移された秦観は、翌春、雷州に到着してすぐに「飲酒詩四首」という陶淵明の「飲酒二十首」に倣擬した詩を詠んだ。その詩の中で師の蘇軾に倣って謫所でも「酒」を酌んで「酔中の真」を得て生きることを願ったが、元来憂愁が尽きない性分の彼には、蘇軾のように苦境下でも楽観を貫く生き方は難しかったらしい。一方、海南島の儋州に謫居していた蘇軾は、蘇轍と入れ替わるように雷州にやって来た秦観と交

遊し易くなることを喜びつつ、失意の秦観を慰撫し激励せんとして、「歸去來兮辭」に継和することを促した。

しかし、秦観がすぐにそれに応じることはなく、元符三年（一一〇〇）春、蘇軾も和韻していなかった陶淵明「擬挽歌詩三首」に心引かれて「自作挽詞」を創作した。彼は、陶淵明のように故郷で子や親戚等に看取られて死ぬのが不可能である現状、そして、謫所で孤独な「死」を迎える未来に対する恐れと悲しみを吐露したのである。

そんな秦観が自らの生き方を再び見出したのは、元符三年（一一〇〇）五月に恩赦を受けて北帰が許され、現実に身心の解放を得てからであり、同年七月に詠んだ「和淵明歸去來辭」は、彼の「再生」の表明であった。しかし、その「歸去來兮辭」に和した約一箇月後の元符三年（一一〇〇）八月十二日、秦観は帰途に立ち寄った藤州の光化亭のほとりにて急逝した。享年五十二である。結局、秦観が幸せな隠遁生活を送ることは叶わず、また、彼の「和淵明歸去來辭」が生前の蘇軾のもとに届くこともなかったのであった。

秦観の「擬陶」および「和陶」の三作品は、主に嶺南の雷州で単発的に創作されたもので、彼は生涯を通じて殊更に陶淵明に傾倒したことはなく、例えば、蘇軾および蘇轍に促されてより後、進んで陶淵明に因んだ詩詞を多数創作し、晩年には自ら「帰来子」と号した晁補之ほどの熱心さは窺えない。しかし、秦観の「擬陶」・「和陶」の作はいずれも中編・長編であり、その内容から晩年の秦観にとって自らの生き方を見つめ直す契機となったことは確かであろう。特に、あたかも自らの最期を予見したかのような秦観「自作挽詞」は、『宋史』の秦観伝でも「先自作挽詞、其語哀甚、讀者悲傷之（先に自ら挽詞を作るに、其の語哀しきこと甚し、読む者之を悲傷す）」とあるように、蘇軾をはじめとした同時代人や後世の人々に衝撃と悲しみをもたらし、最晩年の代表作の一つと見なされた。[20]そして、自らの処世観を自由に詠み表した彼の「和淵明歸去來辭」は、蘇門の門人による最初の「歸去來兮辭」の継和でもあった。これ以来、他の門人たち、更に後世の文人たちによってその内容や表現法を制限することなく詠み継がれ、「和陶詩」の系譜が繋がっていったのである。

注

（1）原田愛「黄庭堅による蘇軾追悼の詩――「帰去来兮辞」の追和に代わるもの」（『中国文学論集』第四十六号、九州大学中国文学会、二〇一七年）。

（2）陶淵明詩は『陶淵明集』（中華再造善本、北京図書館出版社、二〇〇三年）を、蘇軾・蘇轍の「和陶詩」は『東坡先生和陶淵明詩』（台湾国立中央図書館蔵宋慶元間黄州刊本、中国書店、二〇〇八年）こと『和陶詩集』を参照して適宜諸本を見て改めた。

（3）李之儀『姑溪居士後集』（四庫全書本）。

（4）晁説之「答李持國先輩書」（『嵩山文集』巻十五）に「建中靖國間、東坡「和歸去來」初至京師、其門下賓客又從而和之者數人、皆自謂得意也。陶淵明紛然一日滿人目前矣。參寥忽以所和篇視予、率同賦、予謝之」とある。

（5）秦観の詩文については、徐培均箋注『淮海集箋注』（上海古籍出版社、一九九四年）を参照し、適宜諸本を見て改めた。

（6）陶淵明「連雨獨飲」に「試酌百情遠、重觴忽忘天。天豈去此哉、任眞無所先」とあり、また、「飲酒二十首」其九に「此中有眞意」とある。「飲酒二十首」其十四にも「悠悠迷所留、酒中有深味」とあり、これも同義である。福永光司「陶淵明の「真」について」（『東方学報』第三十三冊、京都大学人文科学研究所、一九六三年）に詳しい。『首楞嚴經』は『大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經』の略。また、当時、天下に流布したという釈道原『景德傳燈錄』巻二十五にも「一人發眞歸源、十方虛空、悉皆消殞」とある。

（7）秦観「飲酒詩四首」其二、其三（『淮海集箋注』巻五）の原文と訓読は以下に挙げる。

左手持蟹螯　舉觴矚雲漢　　左手に蟹螯を持し、觴を挙げて雲漢を矚る。
天生此神物　爲我洗憂患　　天は此の神物を生み、我の為に憂患を洗ふ。
山川同恍惚　魚鳥共蕭散　　山川 同に恍惚たり、魚鳥 共に蕭散す。
客至壺自傾　欲去不容間　　客至るも壺自ら傾け、去らんと欲して間を容れず。

客從南方來　酌我一甌茗　　客　南方より来たりて、我に一甌茗を酌む。
我醉方不啜　彊啜忽復醒　　我醉ひて方に啜せず、彊ひて啜せば忽ち復た醒む。
既鑿渾沌氏　遂出華胥境　　既に渾沌氏を鑿ち、遂に華胥の境を出づ。
操戈逐儒生　舉觴還酩酊　　戈を操りて儒生を逐ひ、觴を挙げて還た酩酊す。

（8）「飲酒詩四首」は蘇軾作とする説もあるが、其四の「雷觴淡如水、經年不濡脣」という詩句から、越年して春に雷州の酒を飲んだことが判る。紹聖四年（一〇九七）、海南島に向かう途上に蘇軾は雷州に立ち寄ったが、滞在期間は六月五日から十一日までであった（蘇軾「和陶止酒」序文参照）。かかる状況に鑑みて、これは秦観の作と見なせる。

（9）陶淵明「擬挽歌詩三首」（『陶淵明集』巻四）について『文選』では「擬」字が無い。一海知義「文選挽歌詩考」（『中國文學報』第十二号、京都大學文學部中國語學中國文學研究室、一九六〇年）にこの挽歌の詳しい考察がある。

（10）川合康三『生と死のことば――中国の名言を読む』「十一　死を戯画化する陶淵明」（岩波新書、二〇一七年）。

（11）鮑照『鮑氏集』（四部叢刊本）参照。「代挽歌一首」は「獨處重冥下、憶昔登高臺」と始まる内容である。

（12）呂向注には「言情有厚薄（言は情に厚薄有り）」とあり、吉川幸次郎『陶淵明伝』（中公文庫、一九八九年、初出：新潮叢書、一九五六年）では「現実へのいたいたしい醒覚」であるとし、「親戚たちは、さすがまだありあまる悲しみをのこしている。しかし他人の中にはもう愉快げに歌を歌っているのもいる」と解釈した。一海氏も（9）に挙げた論中で「「他人の歌」を「挽歌」ととる説があるが、それでは、意味が通じにくいであろう」と述べ、吉川氏の解釈に賛同している。一方、内田泉之助・網祐次『文選　詩篇下』（明治書院、新釈漢文大系15、一九六四年）は「他人の歌」を「挽歌」として解釈している。秦観もまた、「挽歌」としたのである。

（13）蘇軾『蘇軾文集』（中華書局、一九八六年）。

（14）元祐八年（一〇九二）、范祖禹（字は淳甫、または夢得）の次子范温が秦観のむすめを娶った。范祖禹は元符元年（一〇九八）十月に謫所の化州で逝去。紹聖四年（一〇九七）に呂大防も循州へ向かう途上の虔州で亡くなった。蘇軾「答秦太虚七首」（『蘇軾文集』巻五十二）の第七首に「近累得書教、海外孤老、志節朽敗、何意復接平生欽友。…（中略）…示諭二范之賢、不惟喜公得婿小范、且以慶吾友夢得之有子爲不死也。言之淚落不已」とある。元符元年（一〇

九八）の冬頃に詠まれた秦観「寧浦書事六首」（『淮海集箋注』巻十一）においても、亡くなった文彦博・呂大防に言及している。

（15）胡仔『苕溪漁隱叢話後集』巻三（商務印書館、一九三七年）。

（16）秦観の官暦は『續資治通鑒長編』巻四四三や『宋史』巻四四四の「秦觀傳」を参照。後者に「紹聖初、坐黨籍、出通判杭州。以御史劉拯論其增損『實錄』、貶監處州酒稅」とあり、『宋史』劉拯傳にも「紹聖初、復爲御史、言元祐修『先帝實錄』、以司馬光・蘇軾之門人范祖禹・黄庭堅・秦觀爲之、竄易增減、誣毁先烈、願明正國典」とある。

（17）「餘休」を日蔭とするのは、班婕妤「自傷賦」に「願歸骨於山足、依松柏之餘休」とあることに拠る。これは潘岳「寡婦賦」（『文選』巻十六）の李善注に引用されている。

（18）『詩経』小雅「由庚」に「「由庚」、萬物得由其道也」と詩序のみ残っており、また、『儀禮』鄉飲酒禮には「乃間歌「魚麗」、笙「由庚」」とある。また、西晋の束晳が「補亡詩六首」其四「由庚」（『文選』巻十九）を詠んでおり、そこで「……五是不逆、六氣不易。愔愔我王、紹文之跡」と詠まれた。これらから「由庚」の主題が推測される。

（19）蘇軾「和陶歸去來兮辭」（『和陶詩集』巻四）。そこで、「歸去來兮、吾方南遷安得歸。…（中略）…悟此生之何常、猶寒暑之異衣。豈襲裘而念葛、蓋得物而喪微」と、南方に謫遷され、故郷に帰ることができない我が身の不遇を嘆きながらも、かかる人生の無常には寒暑に応じて衣替えをするかのように処すべきであり、陶淵明に倣って帰隠するという大略を得れていれば、その場所が何処かというのは些末事であると述べ、結びの第五章では「已矣乎、吾生有命歸有時」と、帰隠には時機があり、それが今このときであると唱っている。

（20）黄庭堅「與王庠周彦書」（『豫章黄先生文集』巻五）に「秦少游沒於藤州、傳得自作祭文幷詩、可爲霣涕。如此奇才、今世不復有矣」とあり、張耒「跋呂居仁所藏秦少游投卷」（『柯山集』巻五十四）に「在嶺外亦時爲文。臨歿自爲挽詩一章、殊可悲也」とある。彼らは秦観の「自作挽詞」を見ていないが、創作行為そのものに悲哀を感じている。